

[書 評]

## 中野香織『ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史』

(吉川弘文館, 2019年)

軽 部 恵 子

著者の中野香織は、服飾史家である。東京大学文学部を卒業後、同大教養学部（イギリス科）に学士入学した。1994年に東京大学大学院総合文化研究科（地域文化研究専攻）の博士課程を単位取得満期退学し、1989年と1994年の2度、英国のケンブリッジ大学で客員研究員を務めた。東京大学教養学部の非常勤講師および明治大学国際日本学部特任教授を経て、2019年から昭和女子大学国際学部英語コミュニケーション学科の客員教授として教鞭を執る。また、2018年設立の株式会社 Kaori Nakano の代表取締役として、ファッション、美、文化について日々発信している。

本書は、英国王室のファッション・アイコンとなっているメンバーの物語を綴っている。具体的には、「ロイヤルスタイルとは何か——プロローグ」、第Ⅰ部「エリザベス2世をめぐる物語」、第Ⅱ部「ヴィクトリア女王とアルバート公、その長男をめぐる物語」、第Ⅲ部「ダイアナ妃とその息子たちをめぐる物語」、第Ⅳ部「ロイヤルジェントルマン」、番外編「アメリカの『ロイヤルスタイル』：ファーストレディの責務とファッション」、「参考文献」、「参考映画、テレビドラマ」、「初出一覧」、「あとがき」、「写真一覧」から構成される。

各章の文章は、著者が一般ファッション誌に寄稿した文章を初出とするものが多いが、参考文献は故ダイアナ元皇太子妃に関する書籍から英国史、英国王室史、スーツの歴史まで、多岐にわたる。著者が参考にした映画とドラマは1990年代以降のものが多く、日本でもロードショーで公開された映画が多数含まれる。たとえば、ダイアナ元妃の葬儀を巡るエリザベス女王の葛藤を描いた『クイーン』(2006年)、エリザベス2世の父ジョージ6世がラジオ演説のために吃音を克服する過程を描いた『英国王のスピーチ』(2012年)、グィネス・パルトローが男装の麗人を演じた『恋に落ちたシェイクスピア』(1998年)、ケイト・ブランシェットが処女王を演じた『エリザベス』(1998年)、スカーレット・ヨハンセンがヘンリー8世の2番目の妃アン・ブーリンの妹メアリーを演じた『ブーリン家の姉妹』(2008年)などである。古い映画、とくにモノクロの映画がないのは、ファッションがわかりにくいからか。

白いウェディング・ドレスが一般的になったのは、1840年にヴィクトリア女王がドイツのザクセン・ゴープルク・ゴータ家のアルバート公との結婚式に着たためである (p. 56)。二人はいとこ同士であった。クリスマスにツリーを飾る習慣も、ヴィクトリア女王がドイツから持ち込んだ (p. 58)。女王の治世下に広まった習慣を日本人が「英国式」と思っているものは少なくない。

ヴィクトリア女王の長男エドワード7世は、デンマーク国王クリスチャン9世の娘アレクサンドラ王女を妻に迎えた。プレイボーイの夫に疲れたのか、アレクサンドラはお気に入りの動物をモチーフにした宝石細工を宝石商ファベルジェにいくつも作らせたという (pp. 86-87)。ファベルジェといえば、ロシア皇帝のインペリアル・イースター・エッグが思い浮かぶ。アレクサンドラの宝石もさぞかし美しい細工であろう。エドワード7世の最後のロイヤル・ミストレス(王室公認の愛妾)はアリス・ケッペル夫人

だが、チャールズ皇太子の妻カミラ夫人の曾祖母の1人である (p. 88)。

ケンブリッジ大学に2度、客員研究員として滞在した著者は、英国社会の階級制度に対してもファッションの視点から鋭い分析を加える。第IV部は「ロイヤルジェントルマン」と称して、チャールズ皇太子、エリザベス女王の従弟にあたるケント公、一気に歴史を遡って17世紀のチャールズ2世 (治世下でスーツのスタイルが完成した)、そしてジェントルマン制度について観察する。日本語では「かっこいい」と言う意味で「ダンディ」を使うが、英国で褒め言葉として言うと、嫌な顔をされる (p. 180)。ジェントルマンは着道楽をしないのである。ギリシャ王室の出身で1947年にジョージ6世の長女エリザベス王女 (当時) と結婚したフィリップは、英国の支配階級に受け入れられるために、スーツを慎み深く着こなすジェントルマンの服装に徹してきた (pp. 15-16)。が、息子のチャールズ皇太子にはやや華やかなダンディズムの要素が入っているという (p. 17)

さらに、近年のジェントルマンは白人だけでない。その好例として、2016年にロンドン市長となったサディック・カーンが挙げられる (pp. 181-182)。カーンはパキスタン系の英国人で、ムスリム (イスラム教徒) であり、モダン・ジェントルマンとも呼ばれる新しいグループに属す (同)。2016年の初夏、英国がEU離脱の是非を問う討論会で揺れていた際、EU残留の論陣を張った1人がカーンであった。新しいジェントルマンたちは労働者階級の英語を話し、わざとくたびれたスーツを着ることもあるそうだが、茶色の靴を履くとシティで不採用になる (pp. 182-183)。やはり、ビジネスの場面で男性は黒の靴を履かなくてはならない。

番外編では、「アメリカの『ロイヤル・スタイル』」と称して、ファースト・レディのファッションが紹介される。著者が最も注目するのはミシェル・オバマである。彼女は、多様性を重要視する夫バラクの方針に沿って、就任式夜の祝賀舞踏会で、無名に近いアジア系アメリカ人ジェイソン・

ウーの白いドレスを着た。これでウーは一気にデザイナーとして注目されたが、他にもキューバ系や移民のデザイナーの服を選んだという (p. 196)。ちなみに、大統領選挙の翌年の1月20日に行われる大統領就任式に、ファースト・レディがどんな服装で参列するか (寒い時期なので、正午の大統領就任宣誓式と連邦議会議事堂からホワイトハウスまでのパレードでは、主にファースト・レディのコートを見ることになる)、夜の祝賀舞踏会でどんなドレスを着るかは、アメリカ国民が多大な関心を寄せるところである。舞踏会のドレスはワシントンのスミソニアン協会国立アメリカ歴史博物館 (The National Museum of American History) に寄贈され、そこで展示される。2017年1月のドナルド・トランプ大統領の就任式では、メラニア夫人のみならず、成人したトランプの娘たち、とくに長女イヴェンカが注目された。イヴェンカがホワイトハウス上級顧問として働く際の服装を著者はどう分析するか、評者は尋ねてみたい。

話を英国王室に戻そう。故ダイアナ元皇太子妃は英国のファッション産業のイメージを洗練されたものとして大きく変えることに貢献した。キャサリン・ケンブリッジ公爵夫人とその子どもたちの着る服は飛ぶように売れるという。そこへ、アフリカ系アメリカ人の母を持つメーガン・サセックス公爵夫人が新たなファッション・アイコンとして英国王室に加わった。キャサリンとメーガンがそれぞれ公務にのぞむと、彼女たちが何をどのように着こなすか、アクセサリーやカバン、靴に至るまで、微に入り細に入り報道されてきた。本書でも、「ロイヤル・ファブ・フォー」(素敵な四人)として、ウィリアム王子夫妻とハリー王子夫妻を紹介している (pp. 146-151)。ただし、弟夫妻は2020年3月をもって「主要な王族」から退き、英国王室の公務をいっさい行わず、現在はアメリカのロサンゼルスに居住する。その経緯についてはいっさい省くが、ファッション雑誌『VOGUE』日本語版 HP にメーガン妃の特集ページ (<https://www.vogue.co.jp/tag/>

meghan-markle) があることから、彼女のファッションとライフスタイルは、国内外で今も注目されているのだろう。

王室のファッションは政治的な意味も持つ。貴族出身ではないキャサリンとメーガンの結婚式も例外ではなかった。2011年4月、キャサリン妃のウェディング・ドレスのレース部分には、英国を象徴する4つの植物、すなわちバラ、アザミ、ラッパ水仙、クローバーが織り込まれていた<sup>1)</sup>。バラは英国とイングランドを、アザミはスコットランドを、ラッパ水仙はウェールズを、クローバーは北アイルランドを意味する。2018年5月の結婚式でメーガンが着用した白く長いベールには、コモンウェルス（英連邦）53カ国を象徴する花々が織り込まれていた<sup>2)</sup>。世界中に生中継された結婚式で、キャサリン妃のドレスは英国の統合を、メーガン妃のベールはコモンウェルスの団結を、それぞれ訴えたのであった。

英国の国家元首であるエリザベス2世の服装は、若い花嫁たち以上に重要な意味を持つ。たとえば、2011年5月に英国王として100年ぶりに女王が隣国アイルランド共和国を国賓として訪問したが、飛行機から降り立った女王は鮮やかな緑色のスーツに身を包んでいた<sup>3)</sup>。英国とアイルランド共和軍（IRA）は1919年から20世紀末近くまで北アイルランドをめぐり対立を繰り返したが、英国女王がアイルランドの象徴である緑色をまとうことで、平和・友好・親善のメッセージが掲げられた。ちなみに、前回のワールドカップラグビーで濃い緑色のユニフォームに身を包んだアイルランドチーム（日本代表と2019年9月28日に対戦）は、アイルランド共和国と英国の北アイルランドの統一チームである。

女性のファッションが政治に影響するのは、英国王室のメンバーだけではない。アメリカのファースト・レディも、その服装が政治的に解釈される。昨年6月、テキサス州にある移民拘留センターにメラニア・トランプ夫人が訪れた際、夫人が羽織っていたジャケットの背に「はっきりいって、

私は気にしない。あなたは？」(I really don't care. Do U?)と大きく書かれており、物議を醸した<sup>4)</sup>。なぜなら、トランプ政権が中南米から押し寄せた不法移民の子どもたちを親から引き離し、センターに収容していたからである。一方、2012年9月の民主党全国大会で夫の応援演説に現れたミシェル・オバマは、手頃な値段のノースリーブのドレスをまるで誂え物のように着こなし、会場の民主党員を熱狂させたのみならず、テレビの生中継や後日の報道を見た選挙民たちに大いに好感を与えた<sup>5)</sup>。

ところで、ファースト・レディのファッションは学術面での研究が進んでいるが、大統領の服装はそうでもない。著者によると、2009年の大統領就任式に際し、オバマはタキシードをブラックタイにすべきところをホワイトタイで現れた。また、ポケットチーフを着用すべきところチーフをささないなど、「間違い」が多かった。4年後の2013年、再び同じように「間違い」を繰り返したが、著者はそれをオバマの政治的メッセージと読み取った。つまり、男性服のルールは英国王室を基準にするが、アメリカは英国の植民地ではないので英国王室に従う必要はない、という主張である(pp. 199-201)。アメリカ史上初めての有色人種の大統領となったオバマが、そう考えたとしても不思議ではない。

以上、本書はファッションの歴史としてはもちろん、英国史(社会、政治)、英米の比較文化、イメージ戦略の方法論など、様々な観点から読むことができる。ファッションに現れる個人の好み、メッセージ、階級などを知らずして、個人が社会から受けているプレッシャー、あるいは個人が社会に与えるインパクトを理解することはできない。

評者の注文としては、色をメインテーマに取り上げる章を書き下ろして1つ入れてもよかったのではないかと思う。先述のとおり、アイルランドと緑色など、色は重要な要素である。本書に色に関する記述はところどころあったが、人物が中心であった(例 ダイアナ皇太子妃(当時)が1991

年にブラジルを訪問した時、ワールドカップ決勝で敗れたブラジル代表チームの緑と黄色を避け、かつ決勝でブラジルを破ったアルゼンチン代表チームの青と白も避けた (p. 101)。あるいは、いっそのこと英国王室を離れて、新たな研究分野として「英国女性政治家」を研究するのはどうか。「おしゃれ番長」の呼び声も高いテリーザ・メイ前首相（在任 2016-2019）を初め、近年の英国女性政治家にはファッションナブルな人が増えてきた。男性政治家は有権者の目にとまりやすいネクタイでイメージ作りをしようが、女性政治家の服装にどういうメッセージを読み解くことができるのか、有権者はどう反応するのか等、興味は尽きない。著者の益々の活躍に大いに期待する。

注

- 1) “Royal wedding : Dress embroiderers were kept in the dark,” BBC, 30 April 2011, <https://www.bbc.com/news/uk-13249018>, last accessed June 9, 2020.
- 2) Sabrina Barr, “Meghan and Harry: The Secret Symbols in the Dutchess’ Wedding Emsemble, from her Commonwealth Veil to Diana’s Ring,” *Independent*, 19 May 2020, <https://www.independent.co.uk/life-style/fashion/meghan-markle-prince-harry-wedding-anniversary-dress-veil-ring-tiara-royal-family-a9522151.html>, last accessed June 9, 2020.
- 3) “Queen Elizabeth’s State visit to Ireland,” RTE, 8 Apr 2014, <https://www.rte.ie/news/galleries/2014/0408/607419-queen-elizabeth-in-ireland/>, last accessed June 9, 2020, “Queen’s visit to Ireland – Tuesday 17 May 2011,” News Blog, *The Guardian*, <https://www.theguardian.com/uk/blog/2011/may/17/queen-visit-ireland-live>, last accessed June 9, 2020.
- 4) Betsy Klein, “Melania dons jacket saying ‘I really don’t care. Do U?’ ahead of her border visit – and afterward,” CNN, June 21, 2018, <https://edition.cnn.com/2018/06/21/politics/melania-trump-jacket/index.html>, last accessed June 9, 2020.
- 5) Arielle Hawkings, “Michelle Obama convention speech dress dazzles, sco-

res,” September 5, 2012, Political Ticker, CNN, <https://politicalticker.blogs.cnn.com/2012/09/05/michelle-obama-convention-speech-dress-dazzles-scores/comment-page-1/>, last accessed June 9, 2020, Erin Carison, “2012 Democratic Convention: Michelle Obama’s Tracy Reese Dress Steals Spotlight,” The Hollywood Reporter, September 5, 2012, <https://www.hollywoodreporter.com/news/2012-democratic-convention-michelle-obamas-tracy-reese-dress-steals-spotlight-368069>, last accessed June 9, 2020.